

第一回現代と親鸞公開シンポジウム

全体テーマ

「へかたられる」死者」

二〇一九年六月一日、大正大学巣鴨キャンパス（豊島区巣鴨）を会場として、第一回現代と親鸞公開シンポジウムを開催した。

今回は、「へかたられる」死者」のテーマのもと、当センター嘱託研究員の中村玲太が問題提起を行い、明治学院大学社会学部教授の加藤秀一氏、花園大学文学部教授の師茂樹氏、大正大学非常勤講師の吉水岳彦氏の三名より提言をいただいた。

提言に続き、南山大学人文学部准教授の佐藤啓介氏をコメンテーターに迎えて、参加者約八十名を含めた全体討議をおこなった。

本稿では、問題提起の要旨、各氏からの提言、ならびに全体討議（文責…親鸞仏教センター）の記録を掲載する。

【開催趣旨】

ただ一つずつの喪われた名前をではなく、「死者」について、あるいは「死者」の名の下に、雄弁に語る「生者」が絶えることはない。かれらは決して反論しない「死者」を

——それが死ぬということの意味なのだから——狂言回しに、安んじておのれの意見を開陳する。とりわけ三・一一以降、そうした声はますます喧しくなっているようだ。

（加藤秀一「亡き人を〈悼む〉こと、
「死者」を忘れること」『アンジャリ』第三十七号）

「死者」の無念などを——あたかもそれが知り得るように——雄弁にかたり、代弁する。そうした「死者」の声を盾にした政治的な主張などは今改めて問われるべきであろう。また「死者」と呼びならわしてきた、我々が悲しみ愛しみ、呼び、時には呼ばれるその存在は抽象的な「死者」などではなかったのかもしれない。我々がかたっていた亡き人の、〈誰か〉としての在り方がそこにあるのではないか。しかし、亡き人の在り方を考える上で死者一般を思考することはもはや無益なのであるか。「死者」の代弁者となるのではなく、「死者」の存在を探求

することで明らかになる亡き〈誰か〉の存在の特殊性（あるいは非特殊性）はないのだろうか。

我々が「死者」を〈かたる〉時、一体そこでは何が行われているのか。「死者」をかたる宗教的な意義も射程に入れながら、浄土学、仏教学、哲学あるいは宗教哲学の観点からそうした根本的な問いに迫ってみたい。

（親鸞仏教センター）

「かたられる」死者

中村 玲太

一、「死者」とかたり

——通約された「死者」と「誰か」

「いのちが大切である」ということですべてが終わればこんな簡単な話はない。私は、「いのちが大切である」と言ったときに、実はそうした言説と現実との間に生じている亀裂を見ていきたい。／大切な人が死にゆくときに、本質的な問題は「命が失われる」ことなのだろうか、という問いをずっと考えています。かけがえないその人がいなくなる、まさに「誰か」が失われるということが悲しいのではないか。「いのち」でも、「何者」どころな人」かでもなく、その人が「誰」であるか、すなわち私との関係性における特異

点であるかが本質的な価値なのではないか。

（加藤秀一「生まれる」ことをめぐる倫理学のために——「誰か」であることの〈起源〉、『親鸞仏教センター通信』第六十号（二〇一七年三月）、四頁）

これは第五十四回「現代と親鸞の研究會」にお招きした加藤秀一（明治学院大学社会学部教授）からの問題提起である。「まさに「誰か」が失われるということが悲しいのではないか」と語る視点は、死者に関しても同型の問いとして考え得るものである。「死者」と呼びならわしてきた、我々が悲しみ愛しみ、呼び、時には呼ばれるその存在は抽象的な「死者」などではなかったのかもしれない。我々がかたっていた亡き人の、「誰か」としての在り方がそこにあるのではないか。

しかし、そもそもなぜこうした問題提起をする必要があるのだろうか。それは、抽象的な、通約された「死者」にすることで、「死者」というものをあまりにも容易く扱える存在に変容させていると思わざるを得ないからである。

これと相反する言説として、岸政彦（立命館大学大学院先端

総合学術研究科教授)「神は負けても、親切は勝つ」を取り上げて考えてみたい。

私は、ぎりぎりのところで生き残ったことを考える。私は自分が生きていくということ、そのそのものを、いつも考えたいと思う。／あるいは、死というものの痛切さと思う。その死というものの、その残酷さ、痛ましさを、私は一切の意味づけもせずに、そのまま考え続けたいと願う。／私が親しくしてきて、そして亡くなってしまったすべての人々のことを、いつも考える。天国も地獄も実在しない。そして、少なくとも私にとつては、神も仏も実在しない。だからかれらは、もうどこにもいない。その、「もうどこにもいない」ということを、考える。／いま沖繩で、沖繩戦の体験者の方々の生活史を聞き取っている。いま四〇人ほど聞いているのだが、だいたい一〇〇人ぐらいは聞いていきたいと思っている。聞いて、文字に起こして、製本して、後世に残したいと願っている。／多くの人々が亡くなった。しかし同時にこの戦は、多くの人々が

生き残った戦でもある。そしてその生き残った人々が、子や孫を育て、いまの沖繩をつくってきた。私はその物語を聞いて、書き残したいと思う。だからずっと、自分の母親が目の前で爆弾にあたり、腹から内臓が飛び出ているのを、家族みんな手で押さえた、という話を聞いている。／そういう死が、数万、数十万とあった。あまりにもたくさん死、というものを、私たちは理解することができない。それはもう、わからない、としか言いようがない。しかし同時に、わがらうともしない、ということも、許されることではない。なんとかわがらうとしなければならぬのである。

(『アンジャリ』第三十六号(二〇一八)所収、四―五頁)

岸は、「あまりにもたくさん死、というものを、私たちは理解することができない。それはもう、わからない、としか言いようがない」というが、これは一人一人の体験を聞いた上での〈誰か〉であるから言えることであろう(岸が「死者」という言葉を使うとしても)。これがどうだろうか、もし数万人もの亡くなった人をたった一言、「死

者」という名詞で括ってしまうのであれば。無数の、バラバラの、一人ですら向き合うのが辛い〈誰か〉であるからこそ遂方に暮れる「あまりにもたくさんの死」なのであるが、数万の死も「死者」という語で括つてしまえば容易に語れてしまうのではないだろうか。数万単位の死ですら一人一人の人格を捨象して、容易に意味づけもできてしまう。「死者」と抽象化された者に対して、一度立ち止まって考える必要があるのではないだろうか。

ただこうした問題とは別の角度として、生者とは違う「死者」という概念を考えることは無意味なのであろうか。もはや生者ではない何者かについて、その存在を考える概念としての「死者」を必ずしも否定する必要はないように思う。そもそもそうした「死者」という概念なしに、上述の問題提起自身も考えることは不可能ではないか。このような問いがあることを付記しておきたい。

さて、死者に関するかたりの問題として、加藤は以下のようにも問題提起している。

……もはや語ることも、感情を（それが「無念」であれ

何であれ）抱くこともできないことこそが、まさしく死者であるということの意味であり、そうであるからこそ死は無惨なのだ。／もしも死者が語れるのならば、そのように密かに変造され、緩和された死の観念によって、不正な殺害や戦争をめぐる問題の根幹は削り取られてしまうだろう。

（「個」からはじめる生命論（NHKブックス、二〇〇七）、一八四頁）

私たち生者が使う死という概念は、死者との隔たりを絶対的なものであると認めながら、それゆえにその隔たりを乗り越えたいと願う両義性をその本質的な構成要素としている。それにもかかわらず、〈非在者の騙り〉がその隔たりを易々と乗り越えて——乗り越えたかのようなふりをして——実は死者を生者自身の政治に動員し、利用することを、われわれは批判してきたのである。

（同上、一八五頁）

これは亡くなった〈誰か〉に仮託する形で起こり得る

「騙り」でもある。「死者」という言葉、そして「かたり」の問題。こうした問題を多角的に検討するのが本シンポジウムの目的である。

二、浄土教において「死者」を語る

浄土教——特に他力を強調する浄土教の立場においては、「死者」を語るという問題が上記の視点と重なる所もあろう。また別の実践的問題として立ち現れてくると考える。

自力無功と「往生」

徹して「自力無功」を主張する浄土教では、「死後」の視点を語り得るのだろうか。これはいささか奇妙な問いに映るかもしれない。「どのように」ではなく、そもそも死後を——特に他者の死後を語り得るのか、こう問いたいのであるが、浄土教であればそれは至極当然に語り得るものだとして理解されているのではないだろうか。しかし、事態はそう簡単ではない。端的な例として、西山深草義の大成

者・顕意（二三三八—二三〇四）の言葉を見てみよう。「四十八問答」の第四十八番目の問い、「臨終狂乱人猶可往生乎」への回答の結論部分である。

ただしかくの如き人の生と不生とは、凡の見る所に非ず。ただ仏のみこれを知る。故に今の行者はただ懃心に法を奉けること畢命を期となすべし。何ぞ勞してこれにおいて言思を費やさんや。

但如是人生与不生、非凡所見。唯仏知之。故今行者唯可懃心奉法畢命為期。何勞於斯費言思哉。

（大正八三、四九五頁下）

臨終に狂乱した人が往生したのかそれとも往生しなかったのか、これは凡夫の知る所ではない、ただ仏のみが知る所だとしている。煩わしく言葉を費やしたり思いを巡らせる必要はないと釘を刺している。ちなみにこの問いは龜山帝¹から送られたものであるが、そうした問いに対して顕意はかなり強い口調で対応しているのである。

往生、不往生ということは一切凡夫の感知する所ではな

い、という言説には顕意の自力／他力論が明確に現われていると言つてよいであろう。同じく「四十八問答」中に、顕意は「もし我能く他力に帰するが故に得生すべしと謂わば、なおこれ自力なり⁽²⁾」としている。こうした教説は、西山義の祖である證空（一一七七一—二四七）の系譜を受け継ぐものである⁽³⁾。自力の領分で何一つできることなどないのであるが、そう自覚しているから往生できるのだ、ということも違う。往生とはどこまでも凡夫の領分を離れた世界であり、生前の言動を見てこの凡夫がどうこう判断できるものではないのだ。

一人称的経験の仮託と宗教的規範

ここで「死者を語る」視点として、一ノ瀬正樹（武蔵野大学グローバル学部教授）の議論を取り上げたい。一ノ瀬は、死者の「一人称的経験の仮託」に関連して、以下のように論じる。

ここで害グラデーシジョン説の帰結として導き出されて

いる「過去時点での一人称的な害経験」とは、当人以外の人々がいわば代理的に当人の経験として、「そうであるべきだ」という規範の形で仮託する害経験であり、そして実は「パーソン」の経験内容とは一般的かつ本質的にそのような規範的な仮託でなければならぬのである、と。

〔死の所有——死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学 増補新装版〕（東京大学出版会、二〇一九）、二二三—二二四頁）

これは「パーソン」とは複数の存在者が声を出し合い、それが焦点されて立ち上がってくる当人性であると、そう考えるべき主体概念なのである。よって「一人称的経験」を、狭い意味での意識内在的な、本人だけにしかアクセスできない内観的な私秘性と考えるはいけない（同上、二二三頁）というのが議論の前提である。

一ノ瀬の議論全体の当否は置くとしても、一人称的経験の仮託が規範的な仮託として事実行われているのは確かであろう。その時にこれが宗教規範的な仮託、特に上述した

ような浄土教的な規範の仮託までを議論に入れるとすれば、どのような事態が起きるのであるか。これは決して突飛な話ではなく、「無念だったに違いない」というような規範的な仮託と同様に、人格を省みて「往生したに違いない」という規範的な仮託は頻繁に行われている。こうした言説を「無念だったに違いない」というような一般的な言説と同じように処理することも可能であろうが（発言者に宗教意識などないとして、しかしいまは西山浄土教ではどのように考えるべきかを示し、一つの問題提起としてみたい。

まず端的に言えば、「往生するに違いない」と語ることはできないというのが基本的な了解となろう。事実というよりは、他力の信の内実として、凡夫の領分で判断すべきではない、という語りになる。勿論そうはいえども語るのが凡夫であるが、その都度自己の領分が自覚されるのが他力の信であろう。ここでは語る事が躊躇されるという〈語り〉こそ宗教的規範として成立していると言えそうである。これは一人称的経験の仮託という視点そのものを奪っているように見えるが、そうではない。證空『散善義他

筆鈔』巻上に「我身ニ出離ノ縁アリト信スレバ、往生不定ナリ」（西叢六、一〇七頁）とあるように、そもそも一人称的自覚において救われるに違いない（出離するはずだ）などと語るのを止まらせるのが他力の信なのである。

それと同時に往生は弥陀において語られる。證空のいわゆる「往生正覚俱時」説は、弥陀成仏の成立が衆生の往生を完成したのだとする。ただ注視されるのは、「往生正覚俱時」説は弥陀成仏の時節をいつとは定めないところに特徴がある。さらに言えば、凡夫の信の成立時を弥陀成仏の成立だとするものであり、いわば一人一人が弥陀成仏の体験を信知するもので、一面、他者とは共有し得ない孤独な世界であることは間違いない。それはまったく孤独な規範なのかもしれない。しかし、完全に凡夫の領分を離れた世界であるからこそ見知らぬ他者にもその世界が普遍的に広がることを信じられるのではないだろうか。

現生往生と「死」という契機

證空にはいわゆる「現生往生」という往生を現世の事実

として語る教説がある。⁽⁵⁾例えば、『玄義分他筆鈔』巻中には以下のようにある。

十方法界同生トラ云フ事。問ヒテ云ク、是未得生ノ者ナリ。何ゾ極楽ノ聖衆ニ挙グルヤ。答ヘテ云ク、是ニ正因、正行アリ。正因ノ謂ニテハ、三心ヲ発ス位即チ往生ナリ。往生即チ是仏体ナリ。依リテ、証得往生ノ人ヲモテ極楽ノ聖衆ニ挙グルナリ。

(西叢五、七二―七三頁)

このように往生を現生の視点で捉えていく證空の言説は注視されるが、一方で、證空は『定善義自筆鈔』巻二で以下のように論じる。

解脱、トイハ、究竟ノ解脱、断惑ノ根本ナリ。是ニ二種ノ解脱アリ。一ニハ、此世ノ解脱、観門弘願ニ帰シテ往生決定スル心ナリ。二ハ、後世ノ解脱、一念ニ華ニ乗ジテ不退ノ境ニ入り、凡聖齊同ニシテ無明ヲ断ズル、是ナリ。知ルベシ。

(西叢二、六七頁)

ここでは「解脱」とされるが、「此世」と「後世」に分けている。当然のように思われるが、必ずしも現生往生のみを主張しているのではない。しかし、では「死」ということが如何なる契機になるのか、ということについて積極的に論じているとも言い難い。やはり現生の信の確立に重きを置いているのは間違いないであろう。

今はひとまず西山の言説を離れよう。「死」という契機について、田島正樹(元千葉大学文学部教授)の言葉を挙げたい。

亡き人が何をもたらしてくれたのかは、すぐにはわからない。生きている間には、それを考えることは難しい。なぜなら、生きている人には、応答し、かかわり続けなければならないからである。／かかわる時間、生きる時間は、互いに積み上げ、紡ぎあう時間であり、何が与えられたのかを考える時間ではない。／意味を考える時間は、亡き人を思う時にやってくる。終わつた生を全体としてまとめ上げ、その存在の意味を問い直すこと、その言動を一つのテキストとして読解する

ことは、死後に初めてやってくる。

〔ラビアータ〕二〇一六年八月二十一日〔URL: <http://blog.livedoor.jp/easter1916/archives/52469129.html>〕〔全体的「本来的」より〕

ここから展開していき、田島は、「それゆえ、人間の言動の（テキストとしての）意味が——つまりは意味として問われる人間存在そのものが、全体的かつ本来的に問われ得るのは、死によって遠く隔てられた他者の存在としてのみである。／それゆえ、愛し合うことは、本来不可能であることがわかる。我々は生きてかわりあう限り、その存在を互いに全体的に本来的に考えることができないからである」と。

本来的な意味で「彼岸」視点に立ち得ないことが「自力無功」、凡夫の有限性の自覚から知らされるとすれば、我々が「死者」と向き合うということは、まさに田島が言うような全体性を開示した存在と真向かいになるということでもある。これほど「死によって遠く隔てられ」ということはないのだから。

【註】

- (1) 拙稿「顕意、了恵の「四十八問答」の史料価値について」(『東アジア仏教研究』第十二号(二〇一四)) 参照。
- (2) 詳しくは、拙稿「一向他力」の主張とその波紋——證空・良遍とその系譜に注目して」(『現代と親鸞』第三十九号(二〇一八))、八十二頁参照。
- (3) 前掲拙稿参照。
- (4) 「往生正覚俱時」説については、拙稿「機法一体」説成立の再検討——證空における「往生正覚俱時」説を中心として」(『真宗教学研究』第三十七号(二〇一六)) 参照。
- (5) 詳しくは、拙稿「證空の現生往生思想」(『中外日報』(二〇一八年一月二十六日付)「論」) 参照。※なお、本シンポジウム後、證空の現生往生思想については、「天台本覚思想と證空——「現生往生」思想の究明を射程に入れて」(『花野充道博士古稀記念論文集 仏教思想の展開』(山喜房佛書林、二〇二〇)) として別に論文と成った。